

立山信仰

立山は古代から宗教的な信仰の対象であった。時代と共に進化した、立山信仰として知られる一連の信仰の根底には、神道や仏教のさまざまな思想が組み込まれている。

異世界の修行の場

最高峰が 3,015m の立山は北アルプス有数の高峰である。富山平野にそびえ立つランドマークであるとともに、貴重な水源でもある。立山はそれ自体が神とされ、先史時代から 1 千年紀最後の数世紀までは遠くから崇拝されるだけだった。人々は、死者の魂が立山の 3 つの峰に宿ると信じていた。

6 世紀に仏教が日本に伝来した後、多くの土着の信仰が仏教の教えの解釈と結びついた。この過程の一つの結果として誕生した修験道とは、修験者（信仰する者）が人里離れた山奥のような、しばしば人を寄せ付けられないような場所に引きこもり、そのような場所に宿ると信じられている神仏の前で精神修養を行う信仰の形である。立山の場合、修験道の導入は修行の場として立山を開いたとされる佐伯有頼の伝説に象徴されている。

有頼は国司の息子であったが、一羽の白鷹に導かれて山に入った。その鳥を追っている途中、有頼は黒いクマに出会い、矢をクマの胸に射た。その後、立山の山頂近くの洞窟で熊を発見した有頼は、熊が阿弥陀如来に化けて有頼に修行を勧めたという。有頼が経験したことは 701 年に起きたとされるが、山頂周辺からは、信者が宗教的に重要な場所に残したとされる杖の頭や短剣などの青銅器が発見されており、立山が 8 世紀には修験の場であった可能性を示唆している。

立山は修験者が修行する全国にある山のひとつであったが、火山活動による異界的な景観が他の多くの修行場と一線を画し、地獄の象徴として想像されるようになった。この信仰では、山が死を連想させることと仏教の冥界の描写が融合された。高木限界はこの世とあの世の境界線に見立てられ、山頂付近の小さな湖は泡立つ血の池に見立てられた。修験者たちは自分の罪と向き合い、魂を清め、死後の極楽往生を容易にすると信じられていた象徴的な再生を得るために、山に登った。

人気のある煉獄

何世紀もの間、魂を清めるために立山に登り、地獄のような地形を通過することは、一部の熱心な信者だけが行う特別な修行であった。しかし、1600 年代に入ると、立山巡礼はより広く知られるようになった。平和で豊かな時代になり、巡礼に必要な時間と資金を持つ人が増えたのである。また、宗教的な旅は庶民に許された数少ない旅行形態でもあった。

立山の「地獄」の話や、その浄化の力は多くの人々の共感を呼び、巡礼者の増加は立山信仰をより大衆的な方向へと発展させた。麓の芦峯寺や岩峯寺の集落には、数十軒の宿坊が建てられた。これらの宿坊は寺院や僧侶の住まいとしても機能し、巡礼者の心の旅に重要な役割を果たした。立山曼荼羅と呼ばれる精巧な絵画は、信仰の教義を一般の人々に説明するために制作された。曼荼羅は立山信仰を広める役割も果たした。各宿坊は布教のために特定の地域を指定され、立山曼荼羅は持ち運びに便利な巻物に描かれ、僧侶が教義を伝えるのに役立った。

立山信仰の人气がピークに達した 1800 年代には、1 シーズンに 6000 人もの巡礼者が立山に登ったと考えられている。伝統的に立山は女人禁制とされていたため、これらの旅人はすべて男性であった。しかし、この禁止令は、女性にとって地獄の山通過を再現する恒例の儀式を生み出すきっかけとなった。毎年 9 月、白い巡礼服に身を包んだ女性信者が芦峯寺の布橋を渡り、あの世に行く象徴的な儀式を行った。この行為には、霊峰に登るのと同じ浄化作用があると信じられていた。

立山への女人禁制は 1868 年の明治維新後に廃止され、多くの神仏習合信仰もなくなった。山頂やその周辺にあった山の神を祀る場所は神社に改められ、立山信仰はまた新たな変貌を遂げた。しかし、それ以前の伝統のいくつかは近年になってから復活している。布橋の神事の再現が 3 年に 1 度行われたり、立山曼荼羅が美術品として評価されるようになったりしている。